

阿嘉島臨海研究所の 2012 年 (平成 24 年)

保坂 三郎*

熱帯海洋生態研究振興財団理事長

岩尾 研二

阿嘉島臨海研究所

The year of 2012 at AMSL

S. Hosaka* · K. Iwao

* E-mail: saburo@amsl.or.jp

2012 年には慶良間海域の保全に関する 2 つの動きがありました。1 つ目は、座間味村と渡嘉敷村とで進めていたエコツーリズム推進法に基づく慶良間地域エコツーリズム推進全体構想が国の認定を受けたことです。慶良間のさんご礁を特定自然観光資源としたもので、海域を含めた特定区域を指定したものではありません。初めての認定となりました。さんご礁をはじめとした島の自然環境を保全しながら、その豊かな自然を活かした観光活動をおこなっていかうというものです。2 つ目は、座間味村で沖縄振興特別推進交付金(一括交付金)を使ったサンゴ育成・植え付け事業が始まったことです。これはサンゴの種苗生産と植え付けに関する技術者を育成しようというもので、具体的には座間味村漁業協同組合が植え付け用のサンゴを生産し、植え付けダイビングを通じて観光業を活性化させるとともに、植え付けたサンゴを管理することで海域の保全を進めていくという事業です。前者については、阿嘉島臨海研究所は現状把握の基礎データとなるモニタリング活動や保全管理活動についてのアドバイスなどで参加することになるのではないかと思います。後者については、すでに漁協の職員に対しての植え付けサンゴ生産の技術研修を開始しており、今後はさらにダイビング業者やダイビング協会などへの植え付けや植え付け後の管理についての指導やアドバイスをおこなっていくことになるでしょう。2009 年に、研究所が設立されてからの 20 年を振り返って、「慶良間

海域でのサンゴの生活やさんご礁の仕組みについての基礎的な情報を蓄積した最初の 10 年と、それを手がかりにサンゴ増殖とさんご礁修復技術、そして地元の人たちとの保全活動に取り組んだ次の 10 年」と書きました(みどりいし 20 号: pp 2-8)。その後の 10 年はどんなものになるか、これまでに 4 年が経過して現在進行中ですが、最近の活動や 2012 年の動きをみると、地元の人たちとの保全活動をさらに充実させながら、自然環境の活用(言葉を変えれば自然環境との共存)を模索する 10 年になるように思います。

2012 年も地元のダイビング協会の人たちとスポット調査やリーフチェックなどさんご礁のモニタリング調査をおこないました。まだまだ多くの地点でサンゴの被度は低いです。小型～中型のミドリイシ群体が増えつつある地点も少なくありません。数地点でオニヒトデとサンゴ食巻貝が出現しているなど不安材料もありますが、再び豊かなサンゴ群集が回復するように期待しています。また、これまで進めてきた複数種のサンゴの種苗生産技術のさらなる向上に努めましたし、植え付けサンゴの様子も追跡しました。2004 年産のウスエダミドリイシは大きなものでは直径 60cm ほどに育ち、ほかの多くの群体の周囲でもスズメダイ類が群れています。そして、夏には産卵が見られました。すっかりさんご礁の一員となって次世代を生み出しているようです。さらに、あか・げるまダイビング協会と(社)水産土木建設技術センターと共同でサ

ングの植え付けも実施しました。これまでは、阿嘉島南岸のマジャノハマでおこなってきましたが、地元の人と話し合い、2012年は新たな取り組みとしてサンゴ群集の荒廃が目立つマエノハマと慶留間港に植え付けしました。今後の経過を継続調査する予定です。こうした活動をおこなうにあたり、日本財団(笹川陽平会長)をはじめとして、たくさんの人たちや組織にご助成とご協力をいただきました。深く感謝いたします。

2013年は財団・研究所の設立25周年の区切りの年になります。考えてみると、財団の設立の目的の一つは、「熱帯・亜熱帯海域の生態系の保全や有効利用についての基礎研究」です。25年間の経験と実績を糧に所期の目的を再確認しながら、冒頭に述べた2つの動きをはじめとした慶良間海域のさんご礁を含む自然環境の保全活動やその基礎となる研究に努力していきたいと思えます。今後も一層のご助力とご協力をいただければ幸いです。

2012年(平成24年)阿嘉島臨海研究所の1年間の動き

List of research activities at AMSL by visitors and staff members in 2012

●主な利用者と研究課題など(敬称略)

- 1月 「海洋動物プランクトンのバイオアッセイへの利用」 雑賀 修((株)日曹分析センター):11月にも実施
- 3月 「阿嘉島およびその周辺のホヤ類とユムシ類の分類学的研究」 西川輝昭(東邦大学理学部生物学科)
「琉球列島における造礁サンゴ群集の遺伝的交流に関する研究」 磯村尚子(沖縄工業高等専門学校)ほか
- 6月 「ミドリイシキメラ群体の受精能力」 服田昌之ほか(お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科)
「トゲスギミドリイシとサボテンミドリイシの雑種に関する研究」 深見裕伸(宮崎大学農学部海洋生物環境学科)ほか
- 7月 「ミドリイシ属サンゴの分類に関する調査・研究」 林原 毅((独)水産総合研究センター)
「阿嘉島周辺の海綿動物の分類学的研究」 伊勢優史(東京大学大学院理学系研究科)
「サンゴの生育に関する研究」 足立芳寛(東京大学大学院工学系研究科マテリアル工学専攻)ほか
- 8月 「サンゴ回復における濁度の影響」 立田 穰(電力中央研究所)
「Visual ecology of box jellyfish」 Anders Garm (University of Copenhagen, Denmark)ほか
- 11月 「造礁サンゴの分類(特にキクメイシ類について)と遺伝子サンプル分析指導」 深見裕伸(宮崎大学農学部海洋生物環境学科)
「ミドリイシ属サンゴにおける野外での交雑の検証」 磯村尚子(沖縄工業高等専門学校)
- 12月 「サンゴの飼育・養殖の研究」 田畑道広((公財)鹿児島水族館公社)

●その他の主な来所者(来所日順)

木村 匡ほか(自然環境研究センター)、川本恒彦ほか(グリーンクロスジャパン)、横井仁志(オフィス横井)、長瀬洋一(広島大学名誉教授)、三浦正治ほか(海洋生物環境研究所)、丸 幸弘(リバナス)ほか、阿嘉小学校児童(総合学習、職場見学)、近畿大学文化会潜水部、大村直樹ほか(国土交通省関東地方整備局東京港

湾事務所)、間辺本文ほか(水産土木建設技術センター)、日本建設業連合会一行、中谷誠治、波利井佐紀(琉球大学熱帯生物圏研究センター)、勝俣亜生ほか(沖縄県水産海洋研究センター)、「大人の離島探検 in 阿嘉島」ツアー一行、海洋産業研究会 沖縄・サンゴ関連研究施設見学会一行、依藤実樹子(琉球大学)、安座間安仙ほか(沖縄県衛生環境研究所)、秋山繁治(ノートルダム清心学園)、橋本 牧(水産庁漁港漁場整備部)ほか、JICA「沿岸生態系の保全とその持続的利用に関する総合研修」研修生、津田宗男(みなと総合研究財団)、大城 晃ほか(座間味村漁業協同組合)

●AMSL 刊行物

「みどりいし」No. 23、「アムスルだより」No. 113-118

●発表論文等

金子 卓蔵・大森 信 (2012) 駿河湾産サクラエビ *Sergia lucens* (Hansen) の産卵生態に関する研究(2): 頭胸甲長と産卵数と卵径の変化. 日本プランクトン学会報 59: 82-87

Omori M (2012) Coral reefs are dying, we can only prevent it if we act now. *Journal of the Black Sea/Mediterranean Environment* 18: 1-9

Omori M (2012) Introduction: Coral reef studies at Palau. *Galaxea, Journal of Coral Reef Studies* 14S: 7-10

大森 信(訳)北見一夫(監訳) (2012) ウォルシュ博士の前立腺がんガイド: 予防、治療、予後. 築地書館, 東京. 268pp (PC Walsh and JF Worthington 著 Dr. Patrick Walsh's Guide to Surviving Prostate Cancer)

大森 信 (2012) 駿河湾サクラエビ漁業のプール制. 白山義久他(編著) 海洋保全生態学 第 4 章. 講談社、東京. pp 211-213

Saba M, Iwao K, Fujita T (2012) A new asterinid sea star, *Disasterina akajimaensis* (Echinodermata: Asteroidea) from the Ryukyu Islands, Japan, with notes on the genus *Disasterina*. *Species Diversity* 17: 21-28

鈴木久美子・中田 力・大森 信 (2012) 駿河湾サクラエビ *Sergia lucens* (Hansen) の産卵生態に関する研究(1): 卵巢内卵の成熟過程、交尾および 1 尾の産卵回数の一試算. 日本プランクトン学会報 59: 20-29

●補足

前号の柳・岩尾の記事(「キンチャクガニ *Lybia tessellata* が保持するイソギンチャクの謎」みどりいし (23): 21-36)において、ハタグモガニの学名を *Lybia hatagumoana* としましたが、本種は 2011 年の時点で新属 *Tunebia* に移されていました(Mendoza JCE, Ng PKL (2011) The Plydectinae Dana, 1851, of the Philippines, with description of a new genus for *Lybia hatagumoana* Sakai, 1961 (Crustacea: Decapoda: Brachyura: Xanhididae). *Zootaxa* 3052: 51-61)。補足して訂正いたします。

●訃報

研究所の設立にご尽力いただき、また、設立当初には研究船の船長だったモチのおじさんこと金城英盛さんが 2012 年 4 月 16 日にお亡くなりになりました。生前のご活動に心より感謝申し上げますとともにご冥福をお祈りいたします。